

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	俳供養
Author(s)	村田, 福太郎
Citation	龍南, 199: 77-85
Issue date	1926-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8887">http://hdl.handle.net/2298/8887</a>
Right	

# 俳 供 養

村 田 福 太 郎

「ヤレ／＼、これでどうやら人間らしい気分になりました」

頃は元禄二年文月の初、處は越中の國境が目と鼻の先に見える市振の關。今しも親知らず、子知らず、犬もどり、駒返し等といふ北國一の難所を越えて、とある旅籠の上り框に腰を下した芭蕉は、ほんとうに助かつたやうな氣持になつて、同行の曾良を顧みて微笑みながら語つた。

「流石の私でさへ、脂汗やら冷汗やら……ソレ今でも此の邊に混つて居ります」曾良は脇の下を見せんばかりに襟をはだけて、手拭を幾度となく入れた。

「まして翁にはさぞかしお疲れでしたせう。御修業の上とはいひ乍ら……」と口の端まで出て來る所をグツト抑へた。

「よく御着きで御座いました。コレハ／＼御老体で……。昨今の暑さは又格別で御座います。家に居ましても、もう汗だく／＼で御座います。ア、あすこで御座いますか。通りつけてゐる私共でさへ、イヤもう餘りよい心地は致しません。」扱ひ馴れた旅籠の主人の言葉に、後は輕い笑ひ。

「どうぞ御洗足を」と下女に促がされて、重い草鞋を脱いで庭向きの部屋に案内された。

「ヤレ／＼草疲れた」と芭蕉は枯木の倒れるやうに其處へ坐り込んで了つた。

「暑さにおあてられになつた上に、搗てゝ加へてあの難所、御疲れになるのも無理は御座いません。今晚は一つユツクリ御休息

なされた方がよろしう御座います」

曾良もグツタリ芭蕉の側に坐つて云つた。何だか是で云ひたいことを云つて胸がスツとしたやうな氣がした。

「すぐ御風呂を御召し下さいませ。疲れが幾分とも薄らぎます」曾良の言葉に切掛に、女中が浴みをすゝめた。

「かうなると、流石旅馴れたものもカラツキシ意氣地がありませんね。ハ、……」曾良は笑ひながら、同意を求めるやうに芭蕉を見た。芭蕉は微笑でそれに答へた。

「デハ一風呂お浴びになつて如何です。疲れがスツカリ出て来ない中がよろしう御座います」

曾良は微笑みながら、太儀さうに出て行く芭蕉を見送つた。

「いゝお湯だ、いゝお湯だ、あゝ結構々々」芭蕉がかう云つて湯から歸つて来た時、曾良は再び微笑んだ。彼はどうしてか芭蕉が好きで、堪らなかつた。前からもさうであつたが、近頃は特に些細なことにも非常に喜び満足する様子が著しくなつて来た。そして色色の善い意味での老人癖が出て来て、何彼につけて言葉を繰返へす。それがしつこく、いや味にも聞えない。如何にも好々爺然として、かうして芭蕉の側に居ると、思はず微笑まざるを得ない多くのことに出逢ふ。彼には、芭蕉といふ人の性格が一種の魅力として自分を惹きつけてゐるやうに思はれた。深川の芭蕉庵で薪水の勞をとつてゐた頃でも、芭蕉の側では喜んで働かれた。一寸した骨折りでも非常に有難がつてくれる。芭蕉は減多に、「あゝしてくれ、かうしてくれ」と云はなかつた。

併し矢張りしてほしいと思つてゐるものがあるらしく、芭蕉の思つてゐることを偶然氣着いてやつた等は、芭蕉は大變喜んでくれるのであつた。その喜びやうが決してワザとらしくなく、如何にも無邪氣な子供が喜ぶやうであつた。曾良はほんとうに骨折甲斐を感じた。芭蕉が時々沈みこんで考へる時でも、それが時としては二日も三日も續くことがあつても、彼は少しも退屈を感じなかつた。偉大なる人、その人が考へこんだ結果が、果してどんなものになつて出て来るだらうか。どんな句だらうか。彼は葦を渡る風や櫓聲を聞いて靜かに考へたり、詩作に耽つたりすることが好きだつた。

二人が膳に向つて、つゝましい夕餉を終つた時には、秋の夜も早五つに近かつた。晝の疲れもあるし、明日の旅もあることだ

から、今晚は早寝ときめて、二人は床に入つた。けれども却々寝つかれなかつた。十五夜にはまだ可成り間のある月が、それでもクツキリとした輪廓を中空に浮び出さしてゐた。月影に薄く照らし出されてゐる小さい庭の面に、松の根方を包んで生茂つてゐる萩の葉には、何時しか月の影を貽して、暗緑色の葉面からは、薰り高い香氣を發散してゐるやうに思はれた。軽く撫で、ゆく秋風に、其の下葉をユラユラ揺られてゐるのが、恰かもそちちにすだいて秋の歌を高らかに歌つてゐる虫の音の拍子をとつてゐるやうに見えた。さういへば、葉が一揺れ揺れると、虫の聲が一際高く、やめばひくめるやうにも思はれる。興ある秋の交歡に、芭蕉の心も曾良の心も益々澄んでゆくばかりであつた。

二人が此の響應に魂を奪はれてゐる時、フト二人の耳を訪れる艶めかしい聲、其の間に混つて太い獨み聲、聞くとともに二人は耳を欬てた。

聲は一間隔てた部屋から聞えて來た。若い女が二人と、も一人は相當年配の男らしく思はれた。話の模様では、伊勢にお詣りするらしく、男が此の市振の關まで送つて來て、明日は歸る筈とみえる。何かクドク言傳を頼む女の聲が一シキリして、後は暫く沈黙が續いた。もう寝たのかと思つたら、又女の聲がした。噺れたやうな聲音の女は、身の不運さを愚痴つてゐるらしく、涙聲にさへなつてゐた。男が頻りに慰めてゐるらしく、處々太く強いアクセントが聞えた。今一人の女も引込まれたらしく、相槌を打つてみたが、割合に諦らめ易い性質らしく、「それだからこそお詣りするのだ」といふやうなことを云つて、却つて慰めてゐた。前の女より一層若やかな、彈力のある聲を持つてゐた。言葉の訛りでは新潟の人らしかつた。その言葉遣ひから考へると、素人でないことはすぐわかつた。

「遊女の抜け詣りでせう」曾良は芭蕉に囁いた。

芭蕉は唯頷いた。

芭蕉の頭にサツト浮んで、又忽ちに消えていつた幻影があつた。それは芭蕉が過去に於て相知つた女性の顔であつた。芭蕉の知つた女性は少なかつた。併し、「自分にもあんな時代があつたのだ」と思ふと、芭蕉は何かクスぐられるやうな氣持になつて、

そゝろに微苦笑を洩らした。「春の日」「桃青二十歌仙」を出した三十時代の自分が慕はしく思はれた。「あの頃は元氣だつた」と考へると、今の身に較べ合はせると、何となく儂い氣がせられた。彼の短かつた青春時代、官能の享樂を追つた時代、それは華やかな過去の幕であつた。「官能の追求から來る空虚があつたればこそ、それに堪えかねたればこそ、自分の内在生命の飛躍が出來たのだ」

と思へば、緑の園が際涯なく過去に廣がつてゐるやうに思はれた。愛を外に求めて得られなかつた芭蕉が、遂に靈に眞の愛を求めやうとした苦闘の幾情景が追憶となつて現はれ來る。

「眞の愛の棲家は果して内にあるのだらうか。自分は眞の愛を得ただらうか。外にも眞の愛があるではないか。自分を時々襲ふ寂寥孤獨の感じ、自分はそれに對して何等の施すべき手段を持たなかつた。内に得た眞の愛、その愛から出た自分の俳句によつて慰められたか。句作に没頭することによつて、淋しさを驅逐することが出來たか。」

芭蕉はかう考へて來ると淋しくて堪らなかつた。

「眞の愛は遂に自分の内外にはなかつたのだ。唯自分は、寂寥を、寂寞の中に沈潜して靜かに内側からそれを眺めることによつて、逐ひ拂ふことが出來たのだ。今では寂寞を餘り感じなくなつてきた。恐れなくなつて來た。却つて樂しめるやうになつて來た。そこから自分の俳諧は出て來たのだ。併し本質に根差した寂寞には耐えられない。愛の抑々何物なるかを自分はまだ如實に知らないでゐるのだ」芭蕉は寢返りをうつた。曾良もまだ眠つてゐないらしかつた。

「此の頃又淋しさが身に沁み出して來た。以前の淋しさと少しも違つてはゐないのに。自分の氣が弱くなつて來たのだらうか。來る淋しさ、來る淋しさに耐えてゐる中に、終には淋しさを逐ひ拂ふ反撥力がなくなつて了ふ時が來るに決つてゐる。淋しさももう自分には飽きが來た。何等の魅力をも持つてゐない。……それだからこそ自分は旅に出たのだ。今までの自分の總決算だ。凡てを出し盡して、新しいものに生きなければならぬのだ。淋しみに安住してゐた自分は、他の何物にか移つて行かなければならない。閑寂を生命としてゐた蕉風に、愛が加はつたらどんなものだらうか」芭蕉はそこに多くの考ふべきことのあ

るのを見出した。一轉機に遭遇したやうに思はれた。

「女達の聲がブツ／＼聞える。それが次第に遠退いて行くやうな氣がして、芭蕉は何時の間にか夢路に入つた。

翌朝、二人が起上つた時には、日はもう高く輝いてゐた。

「少し振りでよく寝られました」芭蕉は珍らしく元氣のよい顔をしてゐた。

「初秋の朝の氣分は格別だ。ほんとうに爽々しい」芭蕉は獨語のやうに云つて、朝の庭に心ゆくばかり新しい空氣を吸ひこんだ。併し其の凹んだ頬には、永い月日の艱難のために深い皺が刻まれてゐた。この一旬餘りの暑氣は、北の國の文月としては未曾有の酷熱であつた。芭蕉はスツカリ暑さに負けて、食物は勿論、睡眠さへも充分にとれなかつたので、瘦せた身体が文字通り骨と皮になつてゐた。曾良は不斷芭蕉の身体を氣遣つた。無理をせぬやうにと色々忠告もしてみたが、こんなことになる、温和な芭蕉も却々聞きいれなかつた。死か更生か、芭蕉は此の一をとつて動かなかつた。死命を賭けての總決算、曾良はそれを知つてゐた。併しそれ以上にはわからなかつた。

曾良が涼しかれと心に祈つた今日の天氣も、カラリと晴れて、午後の灼熱を想はせた。朝晩の涼しさに秋の訪れはそれと知れるが、日中の光線はまだ殘暑の威力を示してゐた。

暑くならない中に、二人は旅籠を立つことにした。二人が草鞋の緒を締めてゐる時であつた。軽い絹摺れの音がしたと思ふと二人の女性が芭蕉の側に寄つて來た。初めは一寸躊躇してゐた様子だつたが、ヤツト思ひきつたらしく、丁度草鞋を穿き終つて穩やかな顔をあげた芭蕉に軽く會釋した。

「あのつかぬことを申し上げますが、御出家様にはどちらに御いでなさいますか、承はりたう御座います」

「私共は金澤の方へ參らうと存じます」芭蕉は軽く答へた。

「さやうにございますか。あの、妾共は新潟のものでございますが。」女は少し顔を赧めた。「此の度お伊勢詣りを思ひ立ちまして此處まで參りましたが、見送りの男衆は今しがた歸りました。これから先、行衛を知らぬ永の道中、女二人の旅ではござい

すし、もしやのことがと氣懸かりでなりません。御見渡し申せば御出家様、妾共をも一緒に御佛の大慈大悲の御袖に絶がらして御連れ下さいませ。御願ひ申します。」

後の女も一緒に丁寧に頭を下げた。視線だけは氣遣はしさうに二人の顔色に注がれてゐた。優しさうな、少しも惡ズレしてゐない二人であつた。其の眼に含まれてゐる幾分の媚も、極く自然な、女性の魅力であつた。

芭蕉はどう答へてよいかわからなかつた。併しそれが芭蕉には迷惑に感ぜられた。芭蕉は今までも、對人的關係に就いては、出来るだけといふよりも、殆ど絶対に消極的態度をとつて來た。それは彼の先天的素質でもあつたが、又彼の境遇がさうさせたのでもあつた。

「私共は御覽の通り雲水の法師です。所定めぬ旅枕、樹下石上を宿とすることもございます。殊に強いといつても女性の脚、興にまかせて氣狂じみた風騷をする私共、所詮貴女方の御ために悪いことはあつても、萬に一、よいことはございません。道行く人も多いことです。其の人達の後を追つて行かれた方がよろしうございませう。」芭蕉は善い意味でよく言へたと思つた。言つてゐる中に、自分の此の畢生の行、若し他者の存在に氣をとられては、との懸念も湧いて來た。

「と申ししても、他に頼るお方もございませぬ。何卒衣の上の御情に御跡を慕ふことでも御許し下さいませ」女は涙を流さんばかりに哀願の意を籠めて云つた。床しい黒髪 of 香が微かに鼻を衝いて漂つて來た。

芭蕉の面は當惑に満ちた。承諾を與へやうか、與へまいか。芭蕉は迷つた。併し芭蕉の心には既に拒否的分子の方が多かつた。

「折角のお頼みですが、前云つた通り、處々寄り路をする私共ですから……。御希望を叶へられないのを残念に思ひます。」これは私の意志ではなくして境遇が然らしめるのです、芭蕉はさう云ひたかつた。

「貴女方の殊勝な發願を思召して、神様は必ず慈悲の御手をお垂れなさることと思ひます」

芭蕉はさう云ふと、振棄てるやうに歩み出した。曾良は默然と跟いていつた。靜かな淋しい沈黙が背後を満たしてゐるのを、

心の限々までもハツキリしすぎる程感じながら。

併し二人の前にも可成りの間、しどまが續いた。一丁程も來た時、芭蕉は初めて口を開いた。

「氣の毒なことをしました。併し私にはあれ以上のことは出来なかつた……」後半は自分に咳くやうに云つた。

「ほんとうに可哀想でございました。」曾良は言葉少なに答へた。黒髪の香りがまだ其の周圍に漂つてゐるやうに思はれた。

「それ程氣の毒に思はれたのなら、同行をお許しになつてよさうなものが……」曾良は思つた。「イヤイヤ、翁にはそれが出来なかつたのだ。五十の坂を越して、スツカリ老衰しきつた翁が、捨身懸命の大業の途上だ。今や日本の俳諧史上に空前の金字の塔が建てられんとしてゐる時だ。幾度自分は翁の悲壯な意氣に感激したことか。翁の背後には死が迫つてゐるのだ。翁の前には光明に輝く殿堂があるのだ。拾つて積むべき金塊があるのだ。嗚呼、大事の前の小事、翁の何處に非を打つべき點があるのか。當然のことではないか、當然のことでは……」曾良の頬は自ら紅潮を呈して來た。

「併し」暫くして又曾良は考へた。「それだからといつて、人生の事實にブツ突かれば逃げを張つても構はないのだろうか。人生の現實の姿、それは瑣々たるものだらうか。金字の塔の嚴肅なる如くに嚴肅なる現實の相ではなからうか。それが翁にとつてのみ許されることなのだらうか。」こゝまで來ると、曾良はわからなくなつて了つた。「どつちだらう。翁にとつては許されることなのだらう。さう考へたい。今までの翁がさうであつたのだから。又それでよかつたのだから。さう考へなくてはならない」其の時、曾良の耳を途切れ／＼に横切つて行く低い聲があつた。

「一家に、遊女も寝たり、萩と月」

それは先刻から一言もものを云はず、俯向加減に歩いてゐた芭蕉の口から洩れた句であつた。芭蕉は聲に出して句の風韻を味つてゐるらしかつた。

「一家に遊女も寝たり萩と月」曾良は何度も此の句を繰返してみた。繰返してゐる中に、何時の間にか彼は句の中に捕へられてゐた。



「萩と月、萩と月、月が翁で萩が遊女といふのだらうか。」さう思ふと、曾良の胸に或光景が浮んできた。

「冷やかに下界を照らしてゐる月。可憐な姿を秋風にうねらせて月に最後の願を捧げてゐる萩。而も月は冷やかに一顧を與へたのみで、遙か西の方に姿を没して了つた。」

「萩は何を求めたのか。そして月は何を與へたのか」曾良は自分が余りに興奮してゐるのに氣がついた。「人の道徳によつてその句を批評してゐる。批評の邪道だ。どうかしてゐる」と思つた。彼は何度も口誦さんである中に、其の持ち味がわかつて来るやうな氣がして來た。

「何といふ面白い句だらう」曾良は漸く落着いて來た。「どことなく一脈の細々とした艶やかな調子が此の句に流れてゐる。女性に對する翁の態度、それは如何にも淡々たるものである。然るに此の句の持つ艶麗さ、そこには何かなくてはならない。翁の心に或る閃きがなくてはならない。若しかすると……、翁は過去の追想に觸れはしなかつたか。翁の江戸放浪時代、何かそこに美しい青春の夢が幾重に織りなされたことだらう。禪に參じて、深く三昧の境地に悟入した翁には、よしやこのことが爆弾には相當しなくても、お祭に子供の弄ぶ花火線香位の感觸があつたのではなからうか。微かに――翁の過去の扉をノックして、又靜かに靜かに去つていつた事件に對して、翁は輕快な憧憬を持つたのに違ひない。それでなくては……」

「面白い句でございます」曾良は思はずさう云つた。

「ハ……。ほんの即吟ですから」芭蕉は俯向いたまま云つた。

「翁の即興の句に何故だか私はより多く親しめる氣が致します。」曾良はほんとにそんな氣がした。

芭蕉は何とも答へなかつた。曾良は自分の言つたとを心に反覆して意味を考へてみた。フト又曾良の考が前に戻つていつた。

「萩と月を美的に解すれば面白い句だ。併し……」曾良は芭蕉の作句の態度を考へた。「併し今先翁は遊女に氣の毒だと云はれたではないか。それに、先刻の今も翁には句が出来たのだらうか。既に凡てを客觀的に見得る冷靜な眼をとり返してゐられるのだらうか。何といふ冷靜さだらう。何といふ……」曾良は芭蕉が恐ろしくなつてきた。「だけど、あすこまで行かなけれ

ばならないのだ。あの境地だ。あの境地こそ……曾良は再び芭蕉を心から禮讀せざるを得なかつた。

二人は矢張り黙々として道をひろつていつた。空はカラリと晴れ、二人の額には汗が滲んでゐたけれど、曾良の危慮した程の暑さは來なかつた。濤聲が或は遠く或は近く聞える此の街道筋には、不斷冷味を連んで來る潮風があつた。道の左側の廣々とした荒野には、萩や薄が漸く生茂つてゐる。叢にすだく虫の音までが二人の沈黙を衛つてゐるやうに思はれた。

「それにしてもほんとうに秋らしくなつた。冷やかに澄んだ空氣だ」さう思つた曾良はフト芭蕉の後姿に眼をやつた。

「奥羽行脚に不退轉の勇猛心を揮ひ起した翁の意氣に較べると、これは又何といふ枯槁した姿だらう。而も其陰には冷厳其の物のやうな氣がついてゐる。何といふ冷やかさ、何といふ嚴かさ、登みきつてゐる。そして淋しい。如何にも淋しい。翁は淋しい人だ。秋だ。秋の心だ。秋の心」曾良は靜かに芭蕉の後に従つた。

「自分の俳供養を誰も知つてはくれないのだらうか。自分といふものを眞に知つてくれる人はないのだらうか」芭蕉はトボくと歩きながらも、堪えられぬ淋しさに襲はれた。

二人の耳に黒部四十八ヶ瀬の川音が間近に聞えて來た。